

# 明治二十年前後におけるヴィルヘルム・ハウフの『隊商』の邦訳

伊 東 勉

## 1. 森鷗外の『盗俠行』

ヴィルヘルム・ハウフの『隊商 (Die Karawane)』を日本にはじめて翻訳、紹介したのは森鷗外である。鷗外は明治十四年七月に東京大学医学部を卒業した。この年の前半期に、すなわち卒業前の半年間に鷗外はこの訳業をなしとげた。翻訳と言っても、実は『隊商』という棒小説の主人公であるオルバザン (Orbasan) の活動する物語や挿話をたくみに組合わせて、百七十四句よりなる古詩の七言歌行にまとめたのであるから、翻案と呼んだ方が妥当であろう。題して『盗俠行』という。この翻案は、今日見ることの出来る、森鷗外の最初の文芸作品である。

『盗俠行』は井上哲次郎が多少の修正を加えて、かれの主宰する『東洋学芸雑誌』第四十号 (明治十八年一月発行) に「訳独逸稗史 医学士 森林太郎稿」と附記して発表した。なお井上はこの翻案漢詩の末尾に「一部好説話。以才筆抒之。字字生動。風趣無限。何等妙作。」と簡単な、しかし好意的な評語をつけ加えている。当時ライプチヒにいた鷗外は、宮崎道三郎からの手紙を通じて、自分の作品が井上哲次郎から尊重されていることを知って「嬉き事」と思った (『独逸日記』明治十七年十一月十二日の項)。

『盗俠行』は、明治二十二年八月に発表された訳詩集『於母影』に、ほとんど訂正しないで転載された。ただひとつオルバザンの漢字による表記は、『東洋学芸雑誌』では「王波鞞」であったが、『於母影』においては「阿巴鞞」となっている。

さて翻案漢詩『盗俠行』を検討するに先立って、オルバザンの活動がドイツ語の原書では、どのようなものであるか、簡単に述べておこう。オルバザンが『盗俠行』でも主人公となっているから。

(1) アラビアの砂漠に単騎、出現して、ゼリム・バルフ (Selim Baruch) と名乗って、メッカからカイロへ向って進む隊商に参加させてもらう。(この冒頭の挿話が、翻案漢詩『盗俠行』の第一段となっている。)

(2) 隊商に参加したオルバザンは同行者たちに「コウノトリになったカリフの話 (Die Geschichte von Kalif Storch)」を物語る。

(3) 隊商の商人の一人であるツァロイコス (Zaleukos) が「切り取られた手の話 (Die Geschichte von der abgehauenen Hand)」を物語る。この物語のなかでフィレンツェでツァロイスコを利をもって誘って美女の首を切断させたのは、棒小説『隊商』の末尾ではじめて判明

するようにオルバザンである。(このツァロイコスの物語が、『盗侠行』の第二段となっている。)

(4) 盗賊の一隊がこの隊商に迫る。そのときゼリム・バルフ(実はオルバザン)が「赤い星の付いている小さい青い布(Kleines blaues Tuch mit roten Sternen)」を槍の先に結びつけて、その槍を天幕の上に掲げさせる。騎馬の盗賊たちは、この青い布を見ると隊商を攻撃することを中止して、大きな弧を描きながら退去した。(この爽快な挿語が、『盗侠行』の第三段となっている。)

(5) この挿話に引き続いて、隊商に参加している商人レザー(Lezah)が物語る「ファトメの救出(Die Errettung Fatmes)」という話。これはレザーの弟のムスタファ(Mustafa)が、海賊に奪われて老貴族の女奴隷となった妹のファトメとその女友達を救出する話である。オルバザンは、この救出に際して二人の手下を連れて、ムスタファと共にその老貴族の城へ乗りこんで、ファトメとその女友達を無事に故郷へ帰らせてやった。レザーはオルバザンに心から感謝している。オルバザンはこの物語で、勇敢な仁侠の士として称賛される。

(6) 隊商はカイロに到着して解散する。ツァロイコスはゼリム・バルフを一席の宴に招待した。その宴席へゼリム・バルフはフィレンツェでツァロイコスに初めて会った時のいかめしい扮装で出現する。そして、ツァロイコスを利をもって誘って、自分の妹の死体の首を故郷の土に埋めたいから切断してほしいと騙して、生きている美女の首を切らせたという自分の罪を自白して、許しを請う。あの美女こそゼリム・バルフの一家を滅亡させた人物であったから、あの詭計は已むを得なかったと説明する。ツァロイコスは相手の罪を許す。(その種明しとも呼ぶべき挿話が、『盗侠行』の第四段となっている)

(7) ツァロイコスと和解したゼリム・バルフは、別れを告げて去る。枠小説『隊商』は、本名を明らかにする、かれの言葉をもって終る。「ひとはわたしを沙漠の主と呼んでいる。わたしは盗賊オルバザンだ(Man nennt mich den Herrn der Wüste; ich bin der Rauber Orbasan)。」

(この簡潔なフィナーレが、『盗侠行』の末段つまり第五段となっている。)

『隊商』には先にあげた「コウノトリになったカリフの話」、「切り取られた手の話」、「ファトメの救出」のほかに「幽霊船の話(Die Geschichte von dem Gespensterschiff)」、「小さいムクの話(Die Geschichte von dem kleinen Muck)」、「偽りの王子の話(Das Märchen vom falschen Prinzen)」という三個の物語が含まれている。これらの六個の物語が、カイロへ向う沙漠旅行の途中で、隊商に参加している商人たちの口から話される。したがって、『隊商』は、六個の物語をおさめた枠小説である。けれども『隊商』は、『デカメロン』や『アラビアン・ナイト』、『ペンタメローネ』などに代表される普通の枠小説とは次の点で相違している。すなわち『隊商』においては、枠内の六個の物語のうち二個は、オルバザンという人物の行動によって起った事件を述べたり(「切り取られた手の話」)、この人物の勇氣と仁侠を描写している(「ファトメの救出」)。ま

た『隊商』はオルバザンの突然の出現をもって始まり、オルバザンが本名を名乗り、本性をあらわして立去ることををもって終る。したがってオルバザンが、この枠小説の枠の部分の主人公である。そして「コウノトリになったカリフの話」をオルバザンが物語るだけではなく、枠内の他の二個の物語もオルバザンについての間接的叙述となっている。このように枠の部分と枠内の物語とが、オルバザンという人物を中心として密接に関連しているのが、枠小説としての『隊商』の特徴である。（多くの物語を羅列する大規模な枠小説では、羅列を自由にしなければならないので、このような（枠の部分と枠内の物語との）密接な関連は不可能である。）当時まだ二十才であった森鷗外は枠小説という概念は理解していなかったであろう。けれども、かれはするどい洞察力をもって枠小説『隊商』のこの構造的特徴を見破った。そして、この特徴にしたがってオルバザンを主人公とする古詩の七言歌行（叙事詩）を創造した。後年の森鷗外の作家としての構想力の強靱が、すでにこの翻案漢詩『盗侠行』に認められはしないだろうか。鷗外の文学作品の魅力は、用語の明快に據るだけではなく、構想のたくみさにある。たとえば鷗外は、閻丘胤撰の「寒山子詩集序」というあまり信用のおけない文章に據って、手際よく「寒山拾得」という短編小説をまとめあげた。

前述したこととの重複をなるべく避けて、鷗外の『盗侠行』を考察しよう。

第一段。三十二句よりなり、起耳視水駙士特企始綺美悝子死己喜の十六字をもって上声紙韻の到底格である。最初の八句で炎熱の沙漠の光景を叙して、そこを進む隊商を次の二句で説明する、駱駝背是隊商舟 涉砂匹似涉海水。そこへ単騎出現する勇士（オルバザン）の英姿については、鳳眼竜髯跨驟駟 軀幹魁梧姿絶倫 威風知是雄偉士と述べている。勇士は隊商に参加することを許される。この翻案漢詩においてはツァロイコスは大賈瑣翁と呼ばれて、隊商の主人となっている。かれについては、次のような描写がある、大賈瑣翁服飾美 斯人丁年失左臂 顔容憔悴似抱悝。

第二段。五十八句よりなり、量昌商郷湯房霜央光傍傷喪償詳床常蒼創亡狂場疆堂忘康良慶腸の二十八字をもって下平声陽韻の到底格である。（すなわち、この古詩『盗侠行』においては、段が終るたびごとに換韻している。）この段で瑣翁は『隊商』のなかの「切り取られた手の話」、すなわち怪人物（オルバザン）に利をもって誘われて、死体の首を切断すると思ひこんで、生きている美女の首を斬った話を物語る。この物語のうちでも、瑣翁が怪人物とフィレンツェ（漢詩では富稜市）のPonte vecchio橋（漢詩では威橋）で初めて会う場面の描写は、ことに見事であるからここに示そう。此夜天寒肌膚慄 帶劍独踏威橋霜 月映巫水金竜跳 華鯨遙吼夜将央 忽見巨人背後立 緋袍金飾映月光 半面掩覆眼爛爛 手攬千金放在傍。巫水とはフィレンツェ市を流れるアルノー河のこと。華鯨とは鐘と撞木のこと。華鯨吼というのは寺院の梵鐘の鳴ることである。黄庭堅の「題浄因壁詩」に催粥華鯨吼夜闌という句がある。

第三段。十八句よりなり。色賊力徳億逼惑臆熄の九字をもって入声職韻の到底格である。

盜賊の一隊が瑣翁を主とする隊商から掠奪しようと肉迫する。けれども怪人物（オルバザン）が「赤い星の付いている小さい青い旗（漢詩では緑旛）を天幕の上に掲げさせる。盜賊たちはこの旗を見ると、秩序整然と退去するという挿話を叙述している。見事な漢詩であるから、その一部分をここに引用しよう。分明賊兵麗不億 隊伍森然刀槍明 臨我帳幕似來逼 客出綠旛插帳頭 笑云君輩勿惶惑 商旅豈輒信客言 手提銃槍憤滿臆 何凶群盜輒嚮過 綠旛奇功兇焰熄。麗とは「整然と並んで」という意味である。

第四段。五十八句よりなり、帷陴眉危時帷茲絲湄虧思時期遺肌私姿隨司辭悲離之披知移基辭の二十八字をもって上平声支韻の到底格である。隊商はカイロ（漢詩では改羅）へ到着して解散する。瑣翁は別れるまえに怪人物を一席の宴に招く。怪人物は、フィレンツェの威橋で瑣翁の前に現れたときの扮装で、その宴席に出現する。瑣翁拳杯娛多時履声橐橐躡梯上 突然隻手蹇紗帷 緋袍金飾半面覆 彼何為者來在茲 脫袍露面是我客。蹇は「掲げる」という意味である。怪人物は、瑣翁を欺いて美女を殺害させたことを自白して、あの美女のために自分の一家が滅ぼされた事情を物語る。今、かれはアラビアの沙漠で盜賊の首領として活動していると言う。為愛異鄉淳樸俗 嘯集同志創洪基。

第五段。八句よりなり、變譴恋靱の四字をもって去声靱韻の到底格である。瑣翁は怪人物の罪を許して、別れに臨んでその名をたずねる。怪人物が名を名乗ることをもって、この叙事詩（古詩の七行歌行）は終る。夙怨氷積不足譴 君国何処君名何 今日別君意恋恋 客把瑣臂一笑云 我是巨盜阿巴靱。

森鷗外は東京へ出て来てから、依田学海に漢文を、佐藤応渠に漢詩を習った。かれの漢詩文の教養はすぐれたものであって、東京大学医学部在学中に外科学担当のヴァイルヘルム・シュルツのドイツ語の講義を漢文で筆記していたので、シュルツの心象を害したと伝えられている。大学を卒業するころから、陸軍に勤務してドイツへ留学するまでの間（明治十四年～明治十七年八月）、森鷗外は漢詩訳に努力して、気晴しをしたらしい。この頃に『盗侠行』だけでなく、浄瑠璃本の『朝顔日記』や『源氏物語』のなかの和歌の漢詩訳がなされたといわれている。

『盗侠行』は白居易の『長恨歌』や『琵琶行』と同じ趣向の古詩の七言歌行である。白居易のこれらの長編叙事詩では客観的歴史的事実が述べられているだけでなく、作者の主観的心情が美しく吐露してある。ところが『盗侠行』では、原作にも由るのであろうが、あくまでも客観的描写にとどまっていた、作者の詩情を表現した句は見いだされない。また『長恨歌』と『琵琶行』では叙述される内容にしたがって多くの換韻がなされているが、『盗侠行』は五段に分れて、段ごとに換韻されているだけである。こうした相違があるし、用語の点においてなお改善すべき点があるかも知れないが、『盗侠行』は百七十四句よりなる大作であって、その規模において白居易の代表的な七言歌行である『長恨歌』や『琵琶行』と比肩することができる。

武元質の『古詩韻範（文化九年刊）』は、主として唐代の古詩を例に挙げて、古詩の韻法を説明した本である。当時、長崎に来ていた朱緑池という清人の説を採って、日本の漢詩人は古詩の韻

法に晦いと述べている。徂来、南郭、春台のような大家も非難を免れない。漢詩人の多くが儒学者であったことにも由るのであろうが、徳川時代の漢詩といえば古詩よりは、むしろ韻法の簡単な近体詩が研究され創造されたようだ。いわんや『盗俠行』のような大規模な七言歌行（長編叙事詩）は見当らないようである。森鷗外は日本近代文学の創始者の一人である。その鷗外が作家としての出発にあたって、『盗俠行』によって、日本の伝統的な文学のジャンルである漢詩を進歩させたというのは、意味深い現象ではないか。しかも、その『盗俠行』はハウフの小説『隊商』の構造を正しく把握した上での翻案である。成田梅里の「辛亥春日賦似従学諸子（嘉永四年作）」のなかの「読書万卷不難期 漢土西洋両可師」という言葉がここに実現している。

## 2. 中川霞城の『沙漠旅行 亜拉比亜奇譚』

明治二十年三月に中川霞城の『沙漠旅行 亜拉比亜奇譚』が大阪の巨文堂（浜本伊三郎）から刊行された。これは縦百二十五ミリメートル、横九十ミリメートル、序文三ページ、本文百四十四ページの小冊子。十二個の銅版の挿画が付いていて、なかなかの美本である。『沙漠旅行 亜拉比亜奇譚』には、梓小説『隊商』のなかの「コウノトリになったカリフの話」「幽霊船の話」そして「小さいムクの話」という三個の物語の邦訳が収められている。

訳者自身の序文によって明らかのように、この本の本文は『日本絵入新聞（大阪で発行されていた新聞）』に「埋草」としてすでに連載、発表されていた。それを巨文堂から単行本として刊行したのである。明治十九年六月から『通俗学芸志林』が大阪で発行されていた。この雑誌の第十二号（明治二十年五月号）に又もやこの『亜拉比亜奇譚』の大部分、すなわち「コウノトリになったカリフの話」と「幽霊船の話」との全体、そして「小さいムクの話」の前半の部分が、『沙漠旅行物語』と改題して転載された。『通俗学芸志林』はこの第十二号をもって廃刊されたので、「小さいムクの話」の後半の部分がこの雑誌に載せられることはなかった。こうしてこの場合には、同一の訳業が三度も発表された。

中川霞城は嘉永三年二月、京都に生れた。明治三年末に京都に外国語学校である欧学舎が開設されて、ドイツ人レーマン(Rudolf Lehmann)がそのドイツ語教師に任命された。中川は欧学舎に入学して、レーマンにドイツ語を習った。明治九年から『物理雑誌（明治九年九月創刊）』『万有雑誌（明治十年七月創刊）』、通俗学芸志林（明治十九年六月創刊）などの関西の雑誌を発行し、明治二十年七月からは東京で『学海の指針（明治二十年七月創刊）』、『少年文武（明治二十三年一月創刊）』などを発行して旺盛な文筆活動を展開した。中川は一方においては西洋の学問ことに自然科学の知識を日本の青少年に興味ふかく分り易く説明しようと努力したし、他方においてはドイツの文学作品を翻訳して紹介した。ドイツ中世の叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の一小部分を「美人薄命 麒麟夢妃児徳（『通俗学芸志林』第二号明治十九年七月号）」という題で翻訳、紹介したり、ピュルガーの『ミュンヒハウゼン物語』の訳を『学海の指針』に創

刊号から断続して掲載したり、シラーの『ウィルヘルム・テル』を脚本体に訳して、そのうちの一部を『少年文武』の創刊号と第二年第三冊に『維廉、的兒、自由之一箭』という題で発表したりした。『亜拉比亞奇譚』は、中川霞城のドイツ文学からの訳業のうちで、もっとも大きな重要なものである。

中川は明治二十四年に家庭の事情で京都へ帰った。京都の教育界とジャーナリズムにおいて活動した。明治三十七年に俳句雑誌『懸葵』を創刊して、俳人四明の名をうたわれた。明治四十四年四月に博文館から『形似神韻 触背美学』という二百二十八頁の大冊を発表した。それより数年前に同じく博文館から『平言俗語俳諧美学』という著作も刊行している。『触背美学』は客観界との不即不離の幻想の中にこそ芸術美が在ることを論証した芸術論であるが、珍しい引用文に富む貴重な文献である。

『亜拉比亞奇譚』は二十四回から出来ている。この訳業の内容と構成を検討しよう。

(第一回―第二回) 炎熱の沙漠を行進する隊商。「国王の甥」と自称するゼリム・バルヒが単騎、出現する。ゼリムは隊商の仲間に加えられる。隊商の五人の商人とゼリムとは休息地ごとに物語を話すことになった。

(第三回―第八回の冒頭部分) ゼリムの物語「国王鶴殿下」の話。すなわち「コウノトリになったカリフの話」。

(第八回の中頃から終りまでの部分) 夜間に沙漠を行進して日中は休息する隊商の状況。

(第九回―第十四回) アハメットの物語「幽霊船の話」。

(第十五回―第二十三回の最初の四頁) ムレイの物語「三尺ムツクの話」。すなわち「小さいムクの話」。

(第二十三回の終りの二頁) ムレイが「三尺ムツクの話」をした翌日。隊商の一行は今日は故郷へ着く日だというので、ゼリム・バルヒに握手をして別れを惜しむ。バルヒは「笑ひを含みて返答て」云う。「余は国君の甥に候はず実は沙漠の大王と呼ばれる大盗人のオルバザンにて候ふ」。この言葉をもって『亜拉比亞奇譚』は終る。

先に述べたように森鷗外は枠小説『隊商』の構造を正しく把握して、オルバザンを中心とする翻案漢詩『盗俠行』を創造した。中川霞城は『隊商』の枠内に収められている六個の物語のうちで、もっとも波乱に富んで面白い三個、すなわち「コウノトリになったカリフの話」、「幽霊船の話」そして「小さいムクの話」を流麗な日本語文に翻訳して紹介するにとどまった。したがってオルバザンときわめて関連の深い「切り取られた手の話」、オルバザンの勇敢と仁俠を具体的に描写している「ファトメの救出」という二個の物語は割愛したし、オルバザンが「赤い星の付いている小さい青い布」を示して、隊商に迫る盗賊らを退却させる挿話や、この枠小説の末尾でツァロイコスにオルバザンが物語る身上話も省略した。こうして『隊商』の枠の部分は、いちじくしく簡単になっている。

中川霞城の『亜拉比亞奇譚』の訳文は、難解な漢語は用いないで流麗に平易に書かれた和文脈の名文である。当時の翻訳には、原文にはまったく存在しない、訳者自身の説明や感想を大胆に書き加えることがしばしば行われた。いわゆる豪傑訳である。中川はこの訳業において、このような豪傑訳は全然おこなわないで、あくまでも原文に忠実に、原文の一語一句も正確に訳出しようと努めている。ここに三個の例をあげよう。

(1) Es zog einmal eine grosse Karawane durch die Wüste. Auf der ungeheueren Ebene, wo man nichts als Sand und Himmel sieht, hörte man schon in weiter Ferne die Glocken der Kamele und die silbernen Röllchen der Pferde; eine dichte Staubwolke, die ihr vorherging, verkündete ihre Nähe, und wenn ein Luftzug die Wolke teilte, blendeten funkelnde Waffen und helleuchtende Gewänder das Auge. So stellte sich die Karawane einem Manne dar, welcher von der Seite her auf sie zutritt. ……

『隊商』の冒頭のこの文章は次のように邦訳してある。或る時隊商が長き列を組み沙漠の中を過ぎたりしが名にし負ふ亜拉比亞の大沙漠の事なれば渺茫千里眼界に入るものは唯碧落の天と黄白の砂のみなりき既に遠き処より駱駝の鐸りんと馬の銀鈴きこの清き音聞え塵烟みだるの擾乱みだるは其前駆の近づきたるにて一陣の風落ちて塵烟を吹き分ては其間隙すきまより武器の光輝きらきら閃閃として洩れ出で衣服はてやかの華麗なる色彩相映じ見えてけり此時一騎ありて隊商に向ひ傍らより斜に乗り来りしが……（全文がルビ付きである。ここでは注目すべき読み方の場合にのみ原文のルビを写した。以下同前。）

(2) Der gelehrte Selim war bald herbeigeholt. Selim sprach zu ihm der Kalif, Selim, man sagt, du seiest sehr gelehrt; guck' einmal ein wenig in diese Schrift, ob du sie lesen kannst; Kannst du sie lesen, so bekommst du ein neues Festkleid von mir, kannst du es nicht, so bekommst du zwölf Backenstreiche und fünfundzwanzig auf die Fusssohlen, weil man dich dann umsonst Selim den Gelehrten nennt. Selim verneigte sich und sprach: Dein Wille geschehe, O Herr! ……

「コウノトリになったカリフの話」の始めにある、学者ゼリムとカリフとの対話の一部。中川は次のように正確に邦訳している。程なく「ゼリム」は召に応じて御前に出でぬ（王）「ゼリム」汝は博学なるよし聞き及べり此文を読み得る歎一見いたし候らへ之を読みなば褒美として新らしき衣服をとらせん、されど万もし一読み得ざれば博士と呼べる名なに負けば頼たのみに十二じふにと躡あしのひらに廿五にじふごの笞杖むちを加へん（老人）そは御意の儘に候と……

(3) Wenn dann die Türe aufging und zuerst der grosse Kopf mit dem noch grösseren Turban herausguckte, wenn das übrige Körperlein nachfolgte, angetan mit einem abgeschabten Mäntelchen, weiten Beinkleidern und einem breiten

Gürtel, an welchem ein langer Dolch hing, so lang, dass man nicht wusste, ob Muck an dem Dolch oder der Dolch an Muck stak; wenn er so heraustrat, da ertönte die Luft von unserem Freudengeschrei, wir warfen unsere Mützen in die Höhe und tanzten wie toll um ihn her……

「小さいムクの話」の始めにある、引退したムク老人の描写の一部。次のように正しく邦訳してある。 偕て戸を推し開きてムツクの出づるや先づ顫れ出づるは大なる頭にて次に見ゆるはいと小さき身体なり汚れ穢なき外套を纏ひ太きズボンに広き帯をメめ長き剣を帯びたるが剣は至て長きが故にムツクが剣を帯び居る歟剣がムツクを帯び居る歟孰れやらんと疑はれしはいと可笑しかりし門を出づると街頭の賑はしきこといはん方なく喜びて走るもあれば帽を空に擲ち叫ぶもあり又小踊するもあり……正確な逐語訳であるが、mit dem noch grösseren Turban という語句が訳文では脱落している。

このような脱落が時々見いだされる。また「小さいムクの話」の中には、悪童たちがムク老人に敬意を表して歌う童謡や老婆のAhavzi がイヌとネコを食事に招く歌がある。この二個の詩を中川は省略している。誤訳とえば、erfahren, ob wir wirklich Storchisch können? という原文を「我々が真に鶴と見ゆや<sup>ため</sup>験し見候はん（訳本二十二頁）」と訳したり、Die Mannschaft oder wenigstens der Kapitano musste vor kurzem gezecht haben を「船将又は乗組員がつひ近き日まで住居りしものと想はれたり（訳本五十七頁）」としているが、目につくだけである。

中川霞城の非常な努力によって、『隊商』のなかの三個のもっとも興味ふかい物語が、流麗な和文調の正確な翻訳として、はやくも明治二十年に日本に輸入された。明治二十年に帝国大学文科大学にドイツ文学科が新設されて、ドイツ語、ドイツ文学は科学的に研究されることになった。また森鷗外が明治二十一年九月にドイツ留学から帰国して、ドイツ文学の翻訳、紹介に精力的に活動した。「近代ドイツ文学の紹介翻訳に於て博士（鷗外のこと）の右に出づるものないことは、既に世間周知の事実である」と茅野蕭々が述べている。ところで明治二十年以前に、ドイツ語にもっとも熟達し、ドイツ文化に深い理解を持って、ドイツの文学作品を流暢な文体で正確に翻訳、紹介したのは中川霞城である。霞城の『維廉、的兒、自由之一箭』の大部分は煙滅してしまっただけで、その他の訳業も、先に見たように断片として終った。『隊商』の中の重要な物語を邦訳して一冊にした『亜拉比亞奇譚』だけが、霞城のすぐれた訳業を示す、まとまった文献として今日も残っている。

### 3. 高橋礼五郎の『妖怪船』

明治二十年十二月に東京の松成堂（松成伊三郎）から高橋礼五郎訳述の『妖怪船 全』が発行された。横九十ミリメートル、縦百二十七ミリメートル、序文二頁、例言一頁、本文四十三頁の



小冊子。彩色挿絵が二枚付いていると言われているが、国会図書館所蔵の本では欠落している。高橋礼五郎がどういう人であったかは、未だに明らかではない。

この短編は、ハウフの『隊商』のなかの「幽霊船の話」だけを和文調で邦訳したものである。高橋健二訳の『隊商』（岩波文庫）のなかの「幽霊船の話」は、一頁が四百五十六字、すべて十二頁であるから、およそ一万字で成立しているのに、この『妖怪船』は、一頁が三百字、すべて四十三頁であるから、およそ一万二千九百字から成立している。その差、約三千字である。なお中川霞城の『亜拉比亚奇譚』のなかの「幽霊船の話」の部分は、一頁が二百三十四字、すべて三十四頁であるから、およそ八千字で成立している。この用字数から見ても、『妖怪船』が、どんなに冗漫な、くどい文体を用いたり、原文にない叙述を多く付加したりしているかが分るだろう。このような訳文になった原因は、次のふたつである。第一に訳者自身が「例言」で「専ら婦幼ノ覽ニ供スルヲ以テ熟字仮名ずかい等ニ拘セス」と述べている。つまりこの訳著は年少の読者や比較的に教養の低い婦人のために書かれたのであるから、それらの読者にこの外国の珍らしい物語を完全に理解させようとして、冗長な説明的文章を多く用いたり、原文にない説明的叙述を随処に付加したりしたのである。第二にこの訳業を一冊の本として発表するためには、すくなくとも四十頁を越えるものにしなければならなかった。そこで訳稿を一万三千字ほどに膨張させるために、くどい訳語を使用したり、原文にない文章を付加したりしたのである。ここに二個の例を示そう。

(1) Gerade als ich achtzehn Jahr alt war, als er die erste grössere Spekulation machte, starb er, wahrscheinlich aus Gram, tausend Goldstücke dem Meer anvertraut zu haben.

この二行の文章が次のように邦訳してある。余が十八歳となりし時、如何なる天魔の魅入しか最初の心に似もやらず、父は拳多の利を得んと、一千有余の金塊を、海山隔てし外国へ、輸出せんとぞ企ける、かくて其船の、港を出帆なせしより、父は日毎に指折数へ、恙も有らで着せしとの報知や有ると待詫しが、余に心勞せし事の、自然其身を傷めたりけん、不凶心地悪しとて打臥せしより、日を経る儘に益々重り、終には葉も咽喉を下らず、日増に衰ふ而已なりしかば、余は驚きも憂もしつ、只管看護に術を尽せど、定業なればや是非も無く遂に黄泉の人とはなりぬ世に悲しき事数多有れども、親を失ふ悲に、よも勝るべきもの有んや。（原文は全文ルビ付きではない。ルビは原文のまま、以下同前。）

(2) In dem Hause kam mir ein altes Männlein mit grauem Bart und langer Nase entgegen und fragte nach meinem Begehr. Ich sagte ihm, ich suche den weisen Muley, und er antwortete mir, er sei es selbst.

この三行の文章が次のように邦訳してある。進み入りつつ案内を、乞ふに答へて立出るは、是れなん一個の老翁なり、髯は飽まで白くして深山に残る雪に似つ、鼻高くして

眼涼く実に其人の為体、凡人ならず見へにけり、斯くて翁は主従が佇む態を左見右見、来意如何にと有しかば、余は進み出で翁に向ひ、我等は他国の者なるが、世にも名高きムウレイ氏に、面会乞はんと推参せしが、知らず貴老は我々が、尋ぬる君に在さずや、若しも果して然らんには、茲に御依頼致し度、且つ御示ヲ仰ぎ度、一件こそ候と思ひ入てぞ云ひければ、翁は臆て答ふる様、如何にも我れはムウレイなり……

『妖怪船』の訳文全体が、ここに示した例文のようである。中川霞城の訳と同じように和文調を用いながら、七五調を基調としている。ドイツ語の原文にはない具体的（形象的）叙述を多く付加して、訳文をひき延ばすと同時に、読者にこの物語を面白く読ませ、理解させようと工夫した。回教の托鉢僧（Derwisch）の呪いのかかった幽霊船のこの物語は、当時の日本の読者には難解なものだった。訳者の高橋礼五郎はそれを理解させようと、多くの叙述を挿入したり、くどい説明をしたりした。今日の我々は高橋の親切心を高く評価すべきであって、かれの文体の冗慢を責めてはならない。高橋の努力は効果をあげた。かれの訳業には重大な誤訳は存在しないし、次に示す原文のほかには脱落はないのであるから、『隊商』のなかでも、もっとも興味ふかいこの物語は、理解し易い忠実な邦訳になっている。脱落しているのは、次の一節である。

Auf einmal schwebte ein Schiff, das wir vorher nicht gesehen hatten, dicht an dem unsrigen vorbei. Wildes Jauchzen und Geschrei erscholl aus dem Verdeck herüber, worüber ich mich zu dieser angstvollen Stunde vor einem Sturm nicht wenig wunderte. Aber der Kapitän an meiner Seite wurde blass wie der Tod. Mein Schiff ist verloren, rief er, dort segelt der Tod. Ehe ich ihn noch über diesen sonderbaren Ausruf befragen konnte, stürzten schon heulend und schreiend die Matrosen herein. Habt ihr ihn gesehen? schrien sie. Jetzt ist's mit uns vorbei!

すなわち、この「幽霊船の話」の語り手であるアハメットの乗っている船が嵐に出会って難破する直前に、幽霊船とすれ違う時の情景の描写である。この一節は「かかる処に船長は、如何なる微候を見たりけん、近きに烈敷暴風の、起らんとする様子なりとて、船人等と呼集へ防禦の準備を命じつつ（訳文六―七頁）」という簡単な文章に書き改められている。この書き変えも、読者の理解を容易ならしめるためになされたのである。

なおこの訳著の十三頁に、「只だ其者の慈悲無慈悲に、我等が運を任す」という言葉がある。これは Ich will mich ihnen doch lieber auf Gnade und Ungnade ergeben の訳語である。auf Gnade und Ungnade はドイツ語独特の表現であって、英語では to be at the mercy of, to throw oneself on the mercy of という熟語はあっても、upon mercy and unmercy (?) という熟語はない。このドイツ語独特の表現を「慈悲無慈悲に」と直訳しているところから見ると、『妖怪船』は英語からの重訳ではなくて、直接にドイツ語の原典に掬ったものらしい。

#### 4. 田中柏城と秋元幻夢生の『泰西奇譚 旅路之空』

明治二十一年四月に東京のイーグル書房から田中柏城（田中祐吉）、秋元幻夢生（秋元隆次郎）共訳の『泰西奇譚 旅路之空』が刊行された。横百十ミリメートル、縦百八十三ミリメートル、訳者の序文三頁をも含めて二百二十三頁。第一図から第八図まで八個の銅版の挿画が付いている。

訳者の田中柏城は「旅路の空はしかき」において、まず冒頭で「ロマン、エルツェーリング、ザーゲー、ファベル、ドラマ、メルヘン（maerchen） など」という文学のジャンルについて、例をあげて説明したのちに、「巴鳥弗（Hauff）」の撰した「メルヘン」を挙げる。「本編の如きは……巴鳥弗氏メルヘンの拔萃なり。」つづいて田中はこの訳著の効用について述べる。この「稗史は」、「閑暇の玩弄物」になるだろう。そのうえ「原著を訳読するの参考書〔と〕なせば即ちひかくかんかへること（はねお）りはは潜思凝思の労を省き以て会席談話の材料となせば…（『旅路の空』は全文、ルビ付きであるが、ここでは注目すべきルビだけを、原文のまま写す。以下同前）」と書いている。すなわち、この訳著は読者の娯楽となったり、会談の話題になったりするだけではなくて、ハウフのドイツ語の原書を訳読するための参考書になるというのだ。

効用のこの第三の部分は注目にあたいする。中川霞城の『亜拉比亞奇譚』の「序」にも、この訳書は「此原書を読まんとする初学者の一助となるべく」と書いてある。ハウフの『隊商』は、ドイツ語の初歩を習得した学生にもっとも適当な教材である。この平易、明快そして興味ふかい物語を収めた童話集は、日本では明治以来、今日に至るまで、ドイツ語の初級あるいは中級の教材として、実に頻繁に使用されてきた。明治二十年頃に日本で教材として複製された『隊商』は、筆者の浅学と怠惰のために未だ発見しないでいる。けれども、当時では需要の少い、したがって採算の取れないこの種の複製はなされなくて、むしろドイツから取り寄せた原書が教材として使用された。鷗外や霞城も原書で『隊商』を習って、これを深く理解したのだろう。明治二十年前後に『隊商』の邦訳が五個も出現した原因のひとつは、この物語集がドイツ語の教材として教室で懇切に訳読されたことにある。「原著を訳読するの参考書となせば」という言葉は、『隊商』が当時、ドイツ語「訳読」の教材として広汎に用いられていたことを暗示している。

さて『旅路の空』の内容と構造を簡単に説明しよう。

(1) 冒頭に「原著者識」としてした「序」が十四頁にわたって訳述してある。これはハウフの『隊商』の発表された『一九二六年度童話年鑑（Maerchen-Almanach auf das Jahr 1826）』に付けられた序文の邦訳である。訳文は修飾に富んで華美ではあるが、原文の大意を正しく伝えている。小説姫が地上の警官（Kritiker 批評家のこと）に苛められて天上の母、想后（Phantasie）の処へ戻るが、母から Almanach という新しい衣裳を与えられて地上を再び訪れるという話である。この衣裳は原文では Almanach であるが、訳文では「泰西奇譚 旅路之空」と書き改めてある。

(2) 「発端」。沙漠を進む隊商。単騎、接近する騎馬武者。世武坡留と名乗るこの騎士は隊商に参加することを許される。隊商の商人は休息地ごとに、交互に面白い物語を話そうということになり、世武坡留がまず「鶴鳥加里夫王之譚」を語りはじめる。すなわち梓小説『隊商』の始めの梓の部分である。

(3) 世武坡留の物語「鶴鳥加里夫王之譚」。これは『隊商』のなかの「コウノトリになったカリフの話」である。二章より成っていて、それぞれの章の冒頭に次のような詞が付けてある。(第一章)「壺裏の靈粉王鳥に化す 池辺の怪鵠踏舞を催す」、(第二章)「廢廬の暗室に化鳥鴟鴞を見る 怪語媒を為して才子佳人を得る」。

(4) 隊商の一人である礼差(原文ではLezah)の物語「波登美救助譚」。これは『隊商』のなかの「ファトメの救出」である。四章より成っていて、それぞれの章の冒頭に詞が付けてある。(第一章)「舟遊を催して佳人賊手に落つ 逆旅を請ふて壮俊怪人を見る」、(第二章)「義賊の一言露命を全ふし 侏儒の怪語謀計を危ふす」、(第三章)「偽髯を着けて牟斯多靈薬を誤まる 恩義に感じて波登美波登美を救ふ」、(第四章)「盟約を守る義賊の応援 宿志を遂る骨肉の再会」。この物語のなかで義賊阿波山(Orbasan)の仁侠が叙述してある。

(5) 無臘(Muley)の物語「美少年耶香夢之譚」。これは『隊商』のなかの話ではなくて、ハウフの他の梓小説『アレサンドリアの酋長とその奴隷たち(Der Scheik von Alessandria und seine Sklaven)』のなかの「小人の鼻助(Der Zwerg Nase)」という話である。訳者はこのように、『隊商』にはない物語を持ち込んでいる。「美少年耶香夢之譚」は次の五章から成っている。(第一章)「紅顔の少年野菜を市に売る 半霜の老媿羹汁を兎に薦む」、第二章「七年の奇夢少年を化す 三尺の侏儒両親を驚す」(第三章)「鏡裏の異状耶香夢初めて己れを知る 宮中の厨頭誤て巧なる料理人を笑ふ」(第四章)「怪鳥の朗吟鼻伯を驚かす 賓客の談話厨人を泣しむ」、(第五章)「新月を期して鼻公湖辺に靈草を見る 遁走を勧めて美美室内に宝物を聚む」。

(6) 「断臂譚」。これは『隊商』のなかの「切り取られた手の話」である。この物語は次の三章から成っている。(第一章)「大志を抱ひて少年遂に家を失ひ 奇計を施して怪客却て裳を贈る」、(第二章)「意馬を狂す四百黄金の光輝 麗質を斃す九寸七首の稻妻」、(第三章)「獄窓夢は冷なり胸裏の月影 法廷疑団は解く舌頭の春風」。元来、「切り取られた手の話(すなわち「断臂譚」)」は、『隊商』の第三話として「ファトメの救出」の直前に述べてある。ところが、この田中の訳本では、第四話として、梓内の最後の物語となっている。そのうえ、この話は『隊商』ではツァロイコス(田中訳では曾呂哥)の物語る体験談であるが、田中訳では、第三人称である曾呂哥(ツァロイコス)を主人公とした客観的な物語になっている。このように第三者ツァロイコスについての物語に書き改めたのは話の筋を読者に理解し易くするためである。

(7) 第四話である「断臂譚」の次に、『旅路之空』の終結の部分が二十頁に亘って付加してある。この部分は、すべての行が一字下げになっている。騎馬の盗賊の団がこの隊商に迫った時に、阿波山が「紅班のある一流の青布を長槍の先端に結び付け……天幕の上に建てさせる」と、賊隊は退去したという挿話。隊商は貝魯 (Kairo) へ着いて解散する。曾呂哥 (ツァロイコス) に別れの宴に招かれた世武坡留は、覆面、緋の衣裳で宴席に現れて老商人を驚かす。粉装を解いた世武は身の上話を語って、曾呂哥に美女を殺害させた罪を詫げる。曾呂哥と世武は心から和解する。「名におふ沙漠の君主なる吾は大盗阿波山」と世武坡留が正体をあらわす言葉で『旅路之空』は終る。

このように枠内の物語の順序を変更したり、ほかの枠小説のなかの物語 (「美少年耶香夢之譚」) を持ち込んだりした。けれども訳者は枠小説『隊商』の構造を正しく把握しているので、阿波山と曾呂哥との関係を述べている「断臂譚」、阿波山の俠勇を示す「波登美救助譚」を枠内の物語として挿入しているし、「発端」と終結の部分とにおいて、この枠小説の主人公である阿波山の雄姿を描き出している。

中川霞城の『垂拉比亜奇譚』と高橋礼五郎の『妖怪船』とは、生硬な漢語は用いないように配慮し、漢字の熟語もルビによって倭語として読ませるようにして (例、穹窿、憂々声、囹圄)、流暢な和文調で書いてある。ところが『旅路之空』は多くの漢語を使用し、時には七五調によって稗史文体で書いてある。二個の例文を示そう。

「凡そ人たる者は艱難を嘗め辛苦を経ざれば善き工夫の出る事なしこれ人の上のみに止まらず歳に発きて歳に散る梅桜とて亦同じ朝霜夜雪を忍ひされば何でか閑けき春にや遭はん。」 (「波登美救助譚」 (第三章))

「桐の一葉に秋立ちて早や仲冬の頃なれば寒月は高く天に懸りて銀漢恰ら滴るが如く白露見る見る霜となりて阿那 (河の名) の河風凄まじく肌へも之が為に凜然たり漸く橋上に至る頃ひ林に響く遠寺の鐘声草木も睡る丑満時誰とも知らず目前に不図頭れたる緋衣の大人 (Rotmantel) 頭布目深に面を覆みて物をも云はず屹立たり」 (「断臂譚」 (第一章) (括弧内の説明は原文のまま。))

この訳著にもたしかに誤訳と脱落が見いだされる。ことに「波登美救助譚」と「美少年耶香夢之譚」にそれが多いようである。けれども、たとえばTürmeを「館」、Tischを「長き椅子」、Pantoffelを「股引」としたような軽率な些細な誤訳が多いのである。訳文を辻褄のあうように繋いでいるので、物語の筋が分らなくなることはない。それぞれの物語の各章の詞を、先に示しておいた。あの詞を見ても、梗概に誤りが無いことは分るだろう。(昭和の始め頃に、語学力の乏しい人が探偵小説を訳したところが、ついに犯人が逮捕できなくなったという笑えない話があった。『旅路之空』はそんな頼りないものではなくて、筋の通った訳業である。) ひとつの例を示そう。

Da schrumpften ihre Beine ein und wurden dünn und rot, die schönen gelben

Pantoffeln des Kalifen und seines Begleiters wurden unförmliche Storchfüsse, die Arme wurden zu Flügeln, der Hals fuhr aus den Achseln und ward eine Elle lang, der Bart war verschwunden, und den Körper bedeckten weiche Federn (Die Geschichte von Kalif Storch).

このドイツ語の文章が次のように邦訳してある。不思議なるかな今迄ありし紅の唇は鋭どく尖り主従のいと美しき黒髯は何時の程にか消へ失せ両脚は細く延て其色赤く両の腕は凝りて翅となり頭は蠅蛭としていと長くのび今まで覆ひし盛衣も皆な忽に消へ失せて総身は渾て白き羽を生じたり。

つまり原文の語句の順序を変更し、原文の語句を省略したり、原文にない言葉を付加したりして、ずいぶん自由に訳しているが、大意はけって誤っていない。『旅路之空』全体が、このような態度で訳してある。そのうえ原文にない長い文章を五十個ほど挿入している。こうした付加は読者の理解を助けるためになされたのである。二個の例を示そう。

(1) 「鶴鳥加里夫王之譚」の(第一章)で、大学者<sup>せりし</sup>齊理霧はラテン語について、原文にはない次のような説明をする。「寔に我君の<sup>のたま</sup>宣ふ如く世に珍しき文にしてこれを羅甸語と称するなり抑も此語を用い居る国と云へるは吾が<sup>らてん</sup>亜刺比亜より西北の方に当れる羅馬と云へる国にして此国勢たる幅狭く長く延びて深く地中海と云へる大なる内海に突出して其形ち<sup>かた</sup>恰も長履に似たり南西東の三面は皆な海に瀕して独り北端のみ峨峨たる峻嶺と相ひ連り土地は極めて沃饒にして草木善く蕃殖せり国の中部は<sup>らてん</sup>羅甸と称して此に有名なる大都羅馬府あり即ち羅甸語なるものは当国人の<sup>はな</sup>談す言葉にして此古書に写したるも又た此の国の文字なり……」

(2) 阿波山に利をもって誘われて美卿可を殺害した曾呂哥は、その翌朝、逮捕されて投獄される。訳者は獄中の曾呂哥の心境を次のように、ずいぶん詳しく叙述する。この心理描写は原文にはまったく見いだされない。「我が為せし事こそ恐しけれ見しらぬ人に衣を売りて身に不相応しき金を受取り剩へ彼れに謀られて妹の首を取りくれよと云はれし事を真に受けて<sup>おど</sup>鈍くも殺せし乙女子は知事の令嬢ならんとは之れ<sup>は</sup>將た如何なる原因にや……夫れかあらぬと知らねども大利を獲んと企てし凡夫の智恵も眼力も五百金の黄金の光沢に忽ち<sup>くらま</sup>眩惑されて彼に役せられし口惜しきは先に立たざる後悔と知れど悟れぬ彼奴の謀略我が身の命運如何なるべきと獄窓に身を<sup>よ</sup>倚せかけて仰き見れば心の闇に引きかへて大虚を浸す満輪の月は隈なく輝き渡り樹梢零る白露も見る見る忽ち霜となる斯く<sup>うるわ</sup>美しき風景も獄裏に嘯く幽囚の物思ふ身は中々に憂愁の種とぞ知られたり。」

原文には存在しない、このような長広舌が『旅路之空』の随処に付加されている。高橋礼五郎の『妖怪船』よりも、いっそうわずらわしい多くの挿入文である。『旅路之空』の訳者はたしかに粹小説『隊商』の構造を正しく把握しているし、粹内の物語の筋も読者の理解できるように伝えている。この点においてこの訳業は、ハウフの名作を日本へ輸入することに寄与した。けれど

もハウフが苦心して完成した平明な、弾力性のあるドイツ語の文章を、推敲の足りない稗史文体で好き勝手に邦訳して、多くの不必要な説明を付加したので、かえって冗慢な読み難いものにしてしまった。それゆえに『旅路之空』は『隊商』の邦訳として、中川霞城や高橋礼五郎の訳著のように尊重されないのである。

## 5. 独幹教史の『沙漠の旅』

明治二十二年五月五日に『絵入朝野新聞』は『江戸新聞』と改題した。『絵入朝野新聞』の明治二十二年一月一日号（第千八百三十五号）から同年一月三十日号（千八百六十号）までの二十六回にわたって、それから三ヶ月後に改題した『江戸新聞』の明治二十二年五月五日号（通号千九百三十号）から同年八月十七日号（通号二千十九号）までの四十九回にわたって、すなわち七十五回に分けて独幹教史の『沙漠の旅』が連載された。この新聞連載小説こそハウフの『隊商』の完全な日本語訳である。なお、第四十四回の載せられた千九百四十七号（五月二十五日号）と第四十五回の載せられた千九百七十八号（七月一日号）との間にも一ヵ月余の休載の時期がある。ここで独幹教史のこの訳業に関係する限りにおいて、『絵入朝野新聞』とその後身である『江戸新聞』について述べておこう。

『絵入朝野新聞』は明治十六年一月二十二日に『朝野新聞』社から小新聞として創刊された。『朝野新聞』は明治八年頃から、成島柳北、末広鉄腸らが健筆をふるって民権派の新聞として重きをなした。明治十四年から急速に高揚した自由民権運動に際して、柳北は改進黨を、鉄腸は自由党を支持した。柳北は明治十七年に死去したが、犬養毅、尾崎行雄らが明治十九年に入社して、この新聞は完全に改進黨の機関紙的存在となった。明治二十三年十一月に経営者が交替すると、犬養、尾崎らは一斉に退社して、『朝野新聞』は急速に衰退した。したがって『沙漠の旅』が連載されていた明治二十二年には、『絵入朝野新聞』は間接ではあるが犬養、尾崎らの影響下にあって真面目な小新聞であった。

小新聞は明治七年創刊の『読売新聞』、明治八年創刊の『平仮名絵入新聞』、『仮名読新聞』、『浪花新聞』などから始まる。紙面が狭く、社説は掲げないで、市井の出来事、花柳界、劇界のニュースなどを面白く報告し、「続き物」と称する小説を載せた。固定読者だけに頼らないで、呼び売りもした。記事はすべてルビ付きである。「情報と大衆との断絶を埋め」ようとする民衆的な新聞である。明治十七、八年頃になると小新聞はその絵入り攻勢、続き物攻勢によって大新聞（たとえば当時の『読売新聞』）を圧倒したといわれている。ことに『絵入朝野新聞』は発行部数を伸ばした。明治二十二年五月五日号の『江戸新聞』の改題の辞には、「追々幸運に相向ひ殊に昨年十月に至りて遂に代価引下をも為し得る場合に立至候（全文ルビ付きであるが、省略）」と書いてある。

小新聞の「続き物」から新聞小説が成立し発達した。『絵入朝野新聞』の明治二十年三月二十

五日号から同年五月十四日号にかけて、春のや主人（坪内逍遙）が文語体に口語をまじえて口語文脈をめざした『此処やかしこ』を連載した。この年から新聞小説は、いわゆる戯作の域を脱すると同時に、自由民権運動の政治文学の生硬を棄てて本格的な文学作品となりはじめた。明治二十年には塚原洪柿園訳の『ビーコンスフィールド伯デイスレリ作、昆太利物語（『東京日日新聞』）』、饗庭篁村訳の『ポー作、黒猫（『読売新聞』）』、同じく篁村訳の『ポー作、ルモールグの人殺し（『読買新聞』）』などの注目すべき訳業が新聞に連載された。また黒岩涙香が明治十九年に『今日新聞（のちの都新聞）』に『コンウェー作 法廷の美人』を発表してから、『都新聞』、『絵入自由新聞』、『東西新聞』そして『江戸新聞』などに矢継ぎ早に、翻案と呼んでもいい自由に訳した探偵小説を発表しはじめた。独幹教史の『沙漠の旅』も、こうした翻訳新聞小説の発展過程の産物である。

『沙漠の旅』の構造を簡単に示そう。

(1) 第一回——第二回。勢稟<sup>セリム</sup>、抜布<sup>ハシラ</sup>が出現して隊商の仲間に入れてもらう。隊商の商人らは休息<sup>たじろ</sup>の屯営ごとに物語を話すことになり、勢稟がまず話しはじめる。枠小説『隊商』の冒頭の枠の部分である。

(2) 第三回——第八回。勢稟の物語「王鶴の話」。「コウノトリになったカリフの話」である。

(3) 第九回。次の亜播滅<sup>アハメット</sup>の物語が始まるまでの中継の部分。『隊商』の枠の連結部分。

(4) 第十回——第十五回。亜播滅の物語「魔船の話」。「幽霊船の話」である。

(5) 第十六回。次の查魯行<sup>チャロウゴウ</sup>の物語が始まるまでの中継の部分。『隊商』の枠の連結部分。

(6) 第十七回——第二十四回。查魯行の物語「断られたる手」の話。「切り取られた手の話」である。

(7) 第二十五回——第二十六回。隊商を一团の賊が襲撃しようとする。勢稟が「赤い星を染出した空色の布」を槍の先に括りつけて天幕の上に掲げさせる。賊はこれを見て退却するという挿話。『隊商』の枠の一部をなす重要な挿話である。

(ここで『沙漠の旅』の連載は一時、中断される。明治二十二年五月五日発行の改題『江戸新聞』の第一号（通号千九百三十号）から挿話を写真銅版に改めて、第二十七回以下が連載されはじめる。)

(8) 第二十七回——第四十四回。礼查<sup>レイチャ</sup>の物語「二女の災難」の話。「ファトメの救出」である。

(9) 第四十五回——第五十九回。牟礼<sup>ムレイ</sup>の物語「蜘蛛男<sup>くもおとこ</sup>」の話。「小さいムクの話」である。

(10) 第六十回——第六十七回。阿利秩<sup>アリチス</sup>の物語「偽公子」の話。「偽りの王子のお伽話」である。



(11) 第六十八回——第七十五回。「沙漠王」という題の一個の物語となっている。隊商は無事に該路府に着いて解散する。査行斯は勢稟を一夕の宴に招く。勢稟はフィレンツェのポンテ・ヴェッキオ（独幹教史訳では「第五の橋」）で査行斯の前に出現した怪人の扮装でその宴席をおとずれる。勢稟はその扮装を取り去ってから、自分の身上話をして、査行斯に美女を殺害させた原因を物語る。最後に勢稟は「我こそは世界に名高き……沙漠王」と名乗って姿をくらます。『隊商』の結末となっている枠の部分を、こうして一個の物語にしたのである。

このように『沙漠の旅』は、『隊商』の枠の部分と枠内の六個の物語を原作の順序通りに忠実に日本語に翻訳している。もちろんこの訳業は新聞小説としてなされたのであるから、各回をひとつの話にまとめようとしているし、後に述べるように原作の筋に数箇所、些細な変更を加えている。けれども訳者の独幹教史はドイツ語に熟達した人であって、原文を正しく意識したり、時には逐語訳さえもしている。ここに一個の例を示そう。

Selim fing an zu übersetzen: > Mensch, der du dieses findest, preise Allah für seine Gnade! Wer von dem Pulver in dieser Dose schnupft und dazu spricht: Mutabor, der kann sich in jedes Tier verwandeln und versteht auch die Sprache der Tiere. Will er wieder in seine menschliche Gestalt zurückkehren, so neige er sich dreimal gen Osten und spreche jenes Wort. Aber hüte dich, wenn du verwandelt bist, dass du nicht lachest, sonst verschwindet das Zauberwort gänzlich aus deinem Gedächtnis, und du bleibst ein Tier. 《

これは「王鶴の話」のなかの魔法の薬に付いているラテン語の説明書を博学のゼリムがアラビア語に翻訳する箇所である。独幹教史の訳は次のとおりである。勢理は得意の態にて直ちに垂刺比亞語に翻訳しける。此記録を聞き得るものはその幸福なること神人と等しかるべし袋の中に蔵めたる散薬を嗅ぎ一たび「母他兒」と唱ふときは望む所の動物にその身を変化することを得べし而してそが啼声を聞いてその語意に通ぜざることなし若し原の形に復らんと欲せば東の方に向ひ前の咒文を反復し唱ふこと三回せよ……只戒しむべきは禽獸となるの間に慎んで笑ふ勿れ……笑ふときは忽ちに咒文全く脳裏を去りて再び人間たらんと欲するも得べからざるなり。（全文ルビ付きであるが、引用文では読み難い個所のルビだけを残した。以下同然。）「神人と等しかるべし」という箇所は、日本人に分り易いように書き換えたのだろう。「東の方に向ひ前の咒文を反復し唱ふこと三回せよ」というのは、原文の趣旨を少し変えている。その他の箇所は正確な逐字訳である。

『沙漠の旅』は上例で示したように、読者に分り易いように書き換えたり、逐字訳をしたりして原文を正しく日本語に移している。ことに冒頭（第一回）から「断られたる手」の終り（第二十六回）まで、つまり『絵入朝野新聞』に連載されている部分では、原文に即して訳出しようと

する態度が守られている。「二女の災難 其一（第二十七回）」以後において、つまり『江戸新聞』に連載されはじめてからは、独幹教史の翻訳態度は自由奔放になって、原作の筋を少し変更したり、原作にない文章を付加したりしている。ここに筋を変更している個所を挙げよう。

(1) 「二女の災難 其十七」において、二女を救出した沙漠王は、二女の主人であった中里キウリス（原作ではThuli-Kos）に厳しい訓戒の手紙を残してから、中里の邸を去る。この手紙のことは原作にはない。

(2) 「蜘蛛男、其十三」において、牟屈ムクツは大猿に教えられて耳や鼻の長くなる果実を食べたり、短くなる果実を食べたりする。この大猿は原作では出て来ない。

(3) 「偽公子 其七」において、費波比丁スイハビチンの曾主費度カシラサウキ（原作ではSaaud, der Sultan der Wechabiten）に王子の真贋を鑑定する二個の小函を与えるのは「宮城の巽の方数里離れし森の中に庵を構え年久しく住む道士」である。ところが原作では、この二個の小函を渡すのは、eine verschleierte Frau in langen weissen Gewändern, Adolzaide と呼ばれる妖女（die Fee）である。

(4) 第六十八回から終回までの「沙漠王」の部分、つまり原作の最後の枠の部分では、次のような筋の変更がなされている。

(a) 原作においては、沙漠王の父と兄がフィレンツェの貴族に滅ぼされる経緯は、次のように簡単に述べてある。Der Florentinische Edelmann reiste in sein Vaterland zurück, zwar mit dem Vorgeben, meinem Bruder Recht zu verschaffen, der Tat nach aber, um uns zu verderben. Er schlug in Florenz alle jene Untersuchungen, welche mein Bruder angeknüpft hatte, nieder und wusste seinen Einfluss, den er auf alle Art sich verschafft hatte, so gut zu benutzen, dass mein Vater und mein Bruder ihrer Regierung verdächtig gemacht und, durch die schändlichsten Mittel gefangen, nach Frankreich geführt und dort vom Beil der Henker getötet wurden. この簡潔な叙述を独幹教史は第六十九回から第七十一回にわたって、次のように敷衍して説明している。すなわち当時はフランス大革命の進行中である。亜歴散アレキサンダリヤのフランス領事をしていた沙漠王の父と兄とは、フランスの革命政府を転覆しようとする反革命分子の陰謀を察知して、証據書類を集めていた。それを持ってフランス本国へ帰る途中、仏稜斯フロレンスでその書類を盗まれた。父と兄とは巴里パリへ着くと裁判所へ召喚されて、叛逆罪のかどで死刑に処せられた。この場合に、盗まれた書類、つまり二人の集めた反革命運動の密書が、かえって父子の有罪の証據となったのである。そのうえ兄を棄て去った仏稜斯の貴族の娘が、二人を反革命分子として告訴していた。原作には見られないこの挿話は、明治維新から自由民権運動の時期にかけての薩長閥の陰險な弾圧を想起させる。

(b) 第七十四回において沙漠王は、(a) で述べたような陰險な策略をめぐらして父

と兄とを死罪におとし入れた反革命家の<sup>チーレンドル</sup>査速度と、それに加担した仏稜斯の貴族に復讐をする。すなわち、まず貴族を短銃で射殺し、つづいて査速度と剣をまじえて斬殺するのである。このような結末は原作にはないけれども、新聞小説の結びとしては必要であった。

(c) 原作では、オルバザンがツァロイスに「切り取られた手の話」の事件の背後にひそむ事情をうち明けてから、その場ですぐさま「われこそは沙漠の主と呼ばれている、盗賊オルバザンだ」と名乗って立去ることをもって終りとなっている。ところが『沙漠の旅』の終回(第七十五回)では、<sup>セリーム</sup>勢稜は<sup>チャロイコス</sup>査行斯、<sup>アハノツト</sup>亜播滅、<sup>ムレイ</sup>牟礼、<sup>レイク</sup>礼克らの商人と共に再び<sup>カイロ</sup>該路府から<sup>メッカ</sup>麥加への『沙漠の旅』に参加する。この二度目の旅行の途中で仲間の盗賊が多人数で迎えに来たので、馬上から大声で「我こそは世界に名高き……沙漠王」と名乗って、査行斯の一行と別れを告げるということになっている。

(d) これまでの論述で明らかのように、独幹赦史はこの訳業全体を通じて、謎の人物である勢稜の本名のオルバザンは一度も挙げないで、これをすべて「沙漠王」と訳しているのである。

筋の重要な変更は、ここで示した六箇所ぐらいであるから、この新聞小説『沙漠の旅』を読んだ人は、ハウフの『隊商』全編を、ほとんど原作の梗概の通りに鑑賞したのである。訳文についていえば、前述のように第二十六回までは、原文にかなり忠実に訳している。第二十七回以後では次第に自由に訳しはじめた。もとより新聞小説のことであるから、読者の興味をそそるために、思いきった舞文曲筆を行っている箇所がある。特に面白い文章をここに示そう。

(1) ……<sup>よ</sup>宜し宜し未だ遠くは行くまじ後追駆けてサーさうちゃと手代が渡せし二百<sup>ドル</sup>弗取の間遅しと服衣の夾囊……上衣の裾を巻し上げ「マンテル戻せ」といふ声を脳から口<sup>たくは</sup>に蓄へて左右の踵は宙を飛び草書<sup>エル</sup>の<sup>かけ</sup>字見ごとく<sup>こしち</sup>駆る街の幾曲り直き心も釣針の<sup>かね</sup>金に釣らるる大魔が時チラリと手代の背景見ると立地<sup>うしちかぜ</sup>肘さし<sup>たちまち</sup>伸べ<sup>すけん</sup>数間離れし此方より提へんとして<sup>あせ</sup>気を促り<sup>つ</sup>空を<sup>あえ</sup>抓むに心著き喘ぎし声振り絞り「暫く待ちてよオーイオーイ(第十九回 断られたる手 其三)。<sup>アルメニ</sup>亜諾河の橋上で奇怪な人物から貰ったマントを一旦、売り渡してから取り戻そうと追いかける様子を描写している。七五調まがいの軽妙な文章。

(2) 怪<sup>へんげ</sup>しの変化其処動くな頼光館の蜘蛛<sup>やかた くも くわい</sup>の怪と相馬御所の猫妖<sup>ねこばけ</sup>と鞍馬の奥の僧正坊とが一所<sup>なつ</sup>に成て出て来たなたとへ何<sup>どん</sup>な化的でも生捕<sup>ばけてき</sup>にして御前へ引くぞ、と手に手に柄物携へて近習<sup>たづね</sup>の侍士八九人、木の葉天狗に烏鼻<sup>さぶらひ</sup>或はヒヨロ高、胴づまり国王目掛け打ちかかる王妃<sup>あわ</sup>は惶<sup>おそ</sup>て声をかけ、卒爾なせそ近習の者共、其は殿下に在すぞと云れて是とは<sup>びっくり</sup>喫驚敗亡、飛んだ粗忽と頭を抱へ狐鼠<sup>こねずみ</sup>として逃込むを……(第五十九回 蜘蛛男 其十五)。これは牟屈の売っているイチジクを食べて、王と王の家族の鼻と耳が長くなった時の騒動を描写した文章。頼光館、相馬御所、鞍馬天狗などという、ずいぶん大時

代の固有名詞を隠喩として用いている。

(3) 『隊商』の最後の粋の冒頭。勢稟セーリム(実はオルバザン)が査行斯チヤロイコス(ツアロイコス)の前に、仏稜斯フロレンスの橋上で出会った赤マントの怪人物の服装で出現する。ハウフのこの小説の中で、もっとも緊張したこの場面を森鷗外は見事に漢詩訳しているが、独幹教史は次のような謡曲の形態にしている。「オオ其姿こそ覚えある」「憶出すも二十年以前」「仏稜斯なる第五の橋詰」「夜も更行く十二時辰」「鐘を合図いごに出来る人影」「仮面に面かは匿かくせども」「眼まなこの光り人を射り」「月つきに祭まつりめく赤上衣マンチ」「従したがひ来れと無礼の一言後あとをも見ずに行きかかるを」「已おのれやらじと追おひ着きて引戻さんと手てをかくる」「機はすみに脱ぬげて奪うば取る上衣しん」「それを還かへして四百金うかうか」「金きんに眼くが眩くられ浮う浮うと切きり断はなしたる美人の生首……(第六十八回 沙漠王 其一)。

これらの文章を読むと、後年の泉鏡花の小説が思い出される。独幹教史も泉鏡花も近代的な内容を、古風な型破りの文体で表現したのである。もっとも鏡花の文章は、独幹教史のそれよりはるかに推敲され洗練されているけれども、先に述べたように殊に原作の最後の粋の部分において、いくつかの筋の変更がなされているし、上例で示したような書き換えが訳業の後半において特に顕著である。しかし、これは連載の新聞小説として読者の興味を維持するためには避けられないことであった。原文の一語一句を検討してハウフの名作の全体を新聞小説として日本に翻訳紹介した独幹教史の努力は、今日において正当に評価しなければならない。

## 6. 結論

ここに森鷗外の『俠盜行』を含めて、明治二十年前後になされたハウフの『隊商』の邦訳を五編、克明に分析し検討してきた。原作『隊商』の特異な粋構造を、それぞれの訳者がどのように把握しているかが、ひとつの興味ある問題となっていた。明治二十年前後にハウフのこの名作が五度も邦訳された原因は次の三個であろう。第一に、ハウフの『隊商』が当時、しばしばドイツ語の教科書として使用されたこと。第二に、自由民権運動の発展と平行して活発に創造された政治文学は明治二十年頃には、主として改進黨系の文筆家の努力によって継続はしていたが、明治十八年から『小説神髓』が刊行されはじめたり、二葉亭四迷の『浮雲』第一編が発表されたりして、ブルジョアの近代文学への道がひらかれようとしたこと。第三に、明治十九年に『伊曾保物語(大久保常吉訳)』明治二十年に『鴛鴦奇談(近藤東之助訳、『デカメロン』の一部)』、『神仙叢話(桐南居士訳、グリムの童話)』のような西洋の寓話、童話、物語が邦訳されはじめたこと。そして『隊商』の舞台であるアラビアの砂漠の状況は徳川時代の末期に刊行された箕作玉海の『坤輿図識』巻一にすでに述べられ、明治三年に大学南校から刊行された内田正雄編『輿地誌畧』巻三、明治十三年改正の文部省版の『万国地誌略』巻一にも説明してあるので、当時の知識人にとっては興味ある異国の風物であったのだろう。

これらの五編の『隊商』の邦訳は、明治二十年代からはじまるドイツ文学移入の準備的労作として高く評価されるべきである。